

遷延性意識障害患者とのコミュニケーションに書字が効果的だった事例

井上 順子¹、秋広 由美子¹、岸部 友美¹、小瀧 勝²

¹自動車事故対策機構 千葉療護センター 看護部、²自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

<はじめに>交通事故から2年を経過した遷延性意識障害患者に、コミュニケーション手段の確立のため書字をリハビリに取り入れた。実施後、自発的に文章を書き、最終的にはコミュニケーションの実用的な手段となった事例を報告する。

<事例>40代女性。頭部外傷性後遺症。気管切開・胃ろうあり。表情変化なし。右上肢の目的動作はあるが、振戦が大きく介助量は大きい。

<行なった看護>

1. 書字のセッティング方法・ペンの持ち方・患者の右上肢の支え方を決めた。
2. 数字を書く。指示された単語を書く練習を行なった。
3. フリートークで会話形式の書字練習を追加した。
4. コミュニケーションの機会を増やすため、車椅子上だけで行っていた書字をベット上でもできるよう、ポジショニングを整えるようにした。

<結果>リハビリの開始時は、右手の振戦が大きく右手の動きが判別しづらかった。数字の0～9を書くのに30分かかった。行なった看護2を5ヶ月継続すると、自発的に文章を書いた。それ以降徐々に振戦も小さくなり、文章も長くかけるようになり、漢字を書くようにもなった。開始後1年半で実用的なコミュニケーション手段として確立できた。

<考察>右手のみを使って書字をするのではなく、右上肢全体を使って介助したことが動きを判別しやすくなったことにつながった。ほぼ毎日継続して反復練習できたことも大事だったと考える。